

〔第十二回春陽展〕

・『東京朝日新聞』 昭和九年五月

春陽展と国展 (一)

一氏義良

一氏 義良 (いちうじ よしなが 一八八八年—一九五二)

美術評論家。島根県八束郡東出雲町(現・松江市)出身。早稲田大学英文科卒業。ヨーロッパに遊学。イギリスの大英博物館図書室で読書勉学。帰国後、海外の古今の美術の動向、とくに古代エジプト美術の紹介に努める。

雑誌『中央美術』を創刊し、編集に携わる。平凡社の百科事典や世界美術全の編集にも関わる。中国の研究を深め、『支那美術史』を著わす。教授の末田利一や石塚太喜治の下で中華民国国立北京芸術専科学校(現中国中央美术学院)の講師を務める。

まず春陽展に入つて、第一室から見ると、大澤鉦一郎氏の六点(*註記引用者)『薔薇』『花もつ少女』『雲』『逆光の海』『白躑躅』『菊』は静物が主で、いづれもまじめな作品だが、感じは硬い方だ。それに、海の絵の外は皆、習作の程度を脱しないので、もつと力作を見せてもらひたかつた。この室の作品には、大体そういつた感じのものが多くやうだ。しかしどれも一般にあかるくて、画面にも動きがあり、何れもしつかりした作風である。色も

形も態度も、或る程度まで突つ込んである。みなセザンヌ的で、かつフランスあたりの模倣はまぬがれないが、とにかくしつかりしてゐる。そして、一々大作できちんとできてゐるのは、よいことだ。水谷清氏も六点(*第二室)『アネモネ』『炬燵』『桐の花咲く』『生蕃娘』『白馬』『牡丹』ある。静物もわるくはない。明るい派手な色彩感覚で、達者な筆に任せて描いてある。

殊に、或るモダンさをつかんでゐる。感覚に敏い、有望な人だ。これを本質的に育てられたらよくなるであらう。『炬燵』といふ若い女を描いたものは、あでやかな甘いもので、くわんこ 玄人にはどう思はれるか知らないが、一番まとまつてゐる。単なる装飾画ではない。——それから、この室(第二室)で気づいたことだが、本莊尠氏(*『切株』)、二見利節氏(*『烏山風景』)その他一、二人はカリエルなどのやり方で描いてゐるが、あれは展覧会画として損ばかりでなく気分が消極的になつて、われわれの堅実な創作としては賛成できかねる。坂口右左視氏の五点(*『並木立』『郊外の櫻』『並木道』『郊外の春』『陽春』)は、どうもあまり感心させられなかつた。まじめに努力して描いてあるようだが、もう一息ではあるまいか? 廣本森雄氏のゴッホ張り(*『少年』)は、本気によく見ようとしてゐる。ある程度まで、力も出てゐる。しかし、創作の苦心はこれからであらう。——

第三室で、青山義雄氏の七点(*『月のある構図』『ニース風景』『郊外』『静物』『花 1』『花 2』『婦人像』)がある。さすがに達者な筆で、ルドンを思はせる軽妙さは、お手に入つたものである。しかし、問題はあんなやうな気分が、果して現代的として受けいれらるべきか、何うかである。非

常時の日本としては、あまりにナンセンス過ぎて、とんだお景物の感じがする。もう少ししつとりした奥行がないと、青山氏のために惜しい。しかし技巧はうまいものだ。楊佐三郎氏にも八点（*《ルクサンブル公園にて》《朝の食卓》《バルテ氏別荘》《グラン・カナル（ベニス）》《古城を望む（モレー）》《秋のモンスリ》《ジプシーの宿車》《サクレクール寺院》）ある。みな風景だ。とにかく描けてはゐるが、折角ヨーロッパに行つて描いたのなら、もつと突つ込んで、自然の本質を把握してもらひたかつた。——足立源一郎氏には二枚の高山連峰と、花が一点ある。山はどちらも同じやうな、雪をもつた景色だ。山好きの足立氏としては努力された試みであらう。しかしどうも物足りない。あの、いつもの「裸体」などの、とびつきたいほどの、みづ／＼さで山に魅せられたい。私はむしろ「花」のうまさ愛撫した。長谷川昇氏は、相変わらずだ。いや、さう申すと失礼だが、何だか時代おくれの感じがする。折角、裸体や女を描きながら、ポーズだつて、色だつて、肉体の表現法だつて、うまさ以外の何者もない。マンネリのは、見る者を憂鬱にさせる。川端彌之助氏の四点の風景（*《妙心寺境内》《林泉の雪》《御室の塔》《早春の道》）、すなほな、まじめな、研究的態度がよい。この人はのびる人といふよりも、じつくりと仕事をして行く人であらう。倉田白羊氏は同感できない。《たそがれ行く》など、あんな情緒的な安っぽい詩はよして、もつとまじめに自然をみつめてはどうでせうか。（続）

（五月二日 付）

春陽展と国展 (二)

一氏義良

第四室では、別府貫一郎氏の風景四点（*註記引用者…《ナポリ小景》《雪の金閣寺》《ナポリ湾の冬》《下賀茂神社》）。ナポリもあれば、金閣寺もある。こんな軽妙といふべき、軽い調子の作品が、春陽会には多い。それもよいが、別府氏あたりからは、もつとじつくりした大作を見せてもらひたい。石井鶴三氏の《手術》。久しぶりで、油絵の力作を出されたことは、うれしかつた。石井さんといふ既成観念を離れても、この《手術》はよい画だ。上乘の部だらう。しかし、漁夫の親方見たやうなドクターや、やせた助手を描きながら、単なる平面模写になつてイデオロギーも気迫も乏しく感じたのは、間違ひでせうか？ ドーミエやグロースの辛辣さはもちろん要求しないが、何だが瀕死の病床の静けさがあつて、各人の緊張も足りないやうだ。無論、頭の下がる技巧ではありましたが。

林倭衛氏の六点（*《海辺の丘（冬）》《或る画家の像》《少女像》《冬の海辺風景》《海辺の丘（秋）》《上総海辺風景》）。かういふ画家も存在したかと思ふほどに、作者の影が薄く、技巧だけのもの。鬼頭壘二郎氏の六点（*《梅雨時》《渥美海岸》《裏木曾の秋》《崖と海》《波（1）》《波（2）》）も、どうもこしらへものの感じで、自然さが少ないやうであつた。

第五室、六室。私はここで代表的な三人の風景画に接した。小栗哲郎、今関啓司、中川一政氏である。殊に中川氏は白眉だ。小栗氏は中川の持た

ない重さと厚みがある。今関氏は粘つた暢達性がある。小栗氏の五点（*）《晩秋の山》《富士川》《興津の海》《夕陽》《明星山》は、もとと同じやうに、風景の迫力だけを凝視してゐる。ただそれが、より深くより手堅く、より地味に掘り下げられつつある。どれを見ても、生命を賭けての仕事といふ感じだ。古い仕事があまりにまじめで、地味だから、分る人が少なからう。殊に《興津の海》《富士川》がよい。見れば見るほど、こくがある。色の調子は古典的で、しかも現実をつかんでゐる。ただ性格的（？）の暗さが気になる。

今関氏は九点（*）《山海春（1）》《山海春（2）》《山海早春》《小品秋》《椿》《野菊とコスモス》《小品山海（A）》《小品山海（B）》《小品（C）》も出してゐる。いづれもよい作品に数ふべきで、まじめで、うまい。そしてよくつかんで、よく描いてあるが、こんなに沢山見せなくてもよさそうに思つた。とにかく海岸を描いたものは、みなよい。

第六室で中川一政氏は、久しぶりで油絵の力作（*）《春淺》《霜の山》《山川呼応》を示されて、これもうれしかった。ちよつと見ると山などの色斑まだらがごたごたし過ぎたやうだが、これはあまりに細かく神経を働かせ過ぎて、力負けした形であらう。南面の趣おもむきも多分に取り入れて、セザンヌなどない、東洋的の潤ひも多い。とにかく複雑な自然感をよく生かして表現しており、《山川呼応》などは、すべての点で間然とするところのない作である。

木村莊八氏の《私のラバさん》。実にうまいものだ。調子、バック、構図、

動き、立体感、皆よろしい。リアリズムとしても、現代詩としても、ヒツトだ。このモダニズムによつて春陽会は朗らかである。

国盛義篤氏（*）《こぶしの花》《秋の朝》《椿》《梅》《堤防》《百日紅》《雪の比叡》は腕達者が目につく。立花長子氏の静物（*）《静物（一）》《静物（二）》、殊に玉ねぎはよく見てある。

第八室の山崎省三氏（*）《台湾婦人の横向図》《台湾の婦人図》《牛つき合わせ》《舟》《海岸》は、まじめな仕事だが、見ばえがしない。氏自身の意識をもつとどうかすべきではあるまいか。鳥海青児氏の八点（*）《風景》《ノートルダム・ド・パリー》《アラビア風の家と海》《水辺》《ベリエ・シュール・モーラン》《グランカナルベニス》《アルゼリーの兵卒》《アラビア風の家》。みなフランス土産だが、こんなきたない、暗いノートルダムは見たことがない。まじめといふことと、現代性の把握とは必ずしも両立しないのであるまいか。鳥海氏の客観的反省を望む。小穴隆一氏の（*）《扇》《乾酪チーズ》《からし》《手鏡》《鏡》《壁鏡》《百日紅》、気のおけない、安らかな世界は、疲労ののちの紅茶の感がある。ただそれだけだ。

第九室で、小林徳太郎氏の静物三点（*）《びわ》《へちま》《椿》《静物》はうまい。よくキャッチしてゐる構図、色彩など、マチスのお手際である。山本鼎の六点（*）《朝鮮の壺へ活けた花》（穂積遠重氏蔵）《朝の白馬山》（山田稔氏蔵）《菊》（内田誠氏蔵）《盆栽のつつじ》（山田稔氏蔵）《メノコのクロックキー》（石川武美氏蔵）《海》（岡崎氏蔵）では、ばらの花が、さすがによい。白馬山も気がきいてゐる。海はあまりにお手際過ぎる。要するに忙中の手す

さびだ。田中善之助、横堀角次郎の両氏は、これといふほどのものを見せ
てくれなかった。

森田恒友氏の遺作の陳列は、まじめな意味で、尊敬の念を捧げて評を避
ける。要するに大正時代の、隠逸的歌俳人の心境吐露であつたといつてよ
からう。（*森田恒友遺作室 油彩画、翰墨画、水墨画 百四十八点）

第十一室以下では、一木淳氏が裸婦その他五点（*《座裸婦》《臥裸婦》
《裸女》《女》《裸体》）に、特色ある明るい、動いた、そしてやはらかく燃え
てゐる表現を感じ、大久保一郎の二点（*《事務室》《ドラヂヤ》）は、現代
的の躍動せる器械や事務室に、春陽会としては珍らしい、生きて活動せる
世界を見て、微笑した。

（五月三日 付）

（*春陽展と国展 （三） 国画会 省略）